# 霧の果て

神谷玄次郎捕物控

藤沢周平

文春文庫

192-12

霧の果て 神谷玄次郎捕物控

定価はカバーに
表示してあります

1985年6月25日　第1刷
1987年9月15日　第5刷

著　者　藤沢周平

発行者　西永達夫

発行所　株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3—23　〒102
TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷　製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-719212-8

文庫

# 霧の果て

## 神谷玄次郎捕物控

藤沢周平

文藝春秋

目次

針の光　7
虚ろな家　47
春の闇　95
酔いどれ死体　135
青い卵　173
日照雨（そばえ）　215
出合茶屋　253
霧の果て　293

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

# 霧の果て

——神谷玄次郎捕物控——

# 針の光

若い女の死体が浮かんでいた。

昔、舟を繋いだ古い杭が五、六本、岸に沿って並んでいる。死体はその杭に戯れるように急に頬をすり寄せたり、少し遠ざかったりしながら、波に揺れていた。地平線を覆っていた雲が割れて、ひとすじの朝の光が川を照らしたとき、死体は光を羞じるように、くるりと身体を返して岸の方に顔を向けた。まだ、ほんのうら若い娘だった。

## 一

「ちょっと」

手荒く肩をこづかれた。

「起きなくてもいいんですか。もう四ツ（午前十時）ですよ」

眼を開くと、お津世が顔をのぞきこんでいる。眉のあたりが険しいのは、苛立っているのである。もう一働きした後らしく手にはずした襷を握っている。

「何を怒っておる」

「家だって客商売ですからね。部屋の掃除をしたいのに、いつまでも寝ていられちゃ困るんですよ」

お津世はここ、蔵前の北にある三好町の小料理屋よし野の女主人である。まだ二十四という

齢で二年前亭主に死なれ、寡婦だった。三つになる男の子がいる。女手ひとつで、構えが小さいとはいえ、料理屋一軒を切り回しているだけに、気の強いところがある。

北の定町回り同心神谷玄次郎は、起き上がって欠伸をした。

「だから俺は、お前の部屋に寝かせてもらえばいいと申したのだ」

「子供がいるでしょ、子供が」

お津世は、声をひそめると叱りつけるように言った。階下で、女中たちが大きな声で笑ったり話したりしている声が聞こえる。

玄次郎はもうひとつ欠伸を追加しながら言った。

「そう言えば、お前の声はバカでかいからな。あれじゃ子供が……」

「シッ、シッ」

とお津世は言った。赤くなって、手を伸ばすと玄次郎の口を塞ぎにきた。

その手をたぐって、玄次郎はいきなりお津世の身体を懐に抱きこんだ。お津世は立ち働いている姿など見ると並みの背丈で、どこか貫禄さえ感じられるほどだが、こうして抱きすくめてみると、意外なほど骨細で小柄な女である。だが、その骨細な身体は、裸になると魅惑的な膨らみを隠していて、お津世を抱きながら、玄次郎は、死んだ亭主は心を残したに違いない、と思うことがある。その亭主はひとに殺された。犯人をつかまえたのが縁で、玄次郎はそれ以来よし野に入り浸っている。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

「いやねえ」
玄次郎の腕から解き放たれると、お津世はのろのろと身体を起こし、髪に手をやりながら玄次郎を軽く睨(にら)んだ。
「朝っぱらから、さ」
だがその眼は潤み、唇は生き生きと血の色を浮かべ、頬は上気している。女などというものは、所詮けだものだな、と玄次郎は思う。唇を吸われながら、お津世は無意識に腰をくねらせていた。
――むろん、男もけだものだ。
玄次郎は思った。
「おかみさん」
梯子(はしご)の下で女中の声がした。
「お客さんですよ」
あら、どうしようと呟いて、お津世はすばやく襟を直すと、澄ました声を張った。
「はい。いま行きますよ」
ほんとに、もう起きて下さいよ、とお津世はまだ欠伸をしている玄次郎に、さっきとは違った優しい声音で言い残すと、階下に降りて行った。
だがお津世はそのまま現われず、梯子を踏む音がして部屋をのぞいたのは、むさくるしいひ

げ面だった。
「へッへ」
とひげは笑った。
「お邪魔でしたか」
「……」
玄次郎は黙ってひげを見つめた。
「そろそろお役所に行く時刻でしょ、旦那。そんな布団の上にとぐろを巻いていていいんですかい」
「また、人が死んだかい。銀蔵」
へ？　と言ったが、ひげ面が急に引き緊まった。男は岡っ引である。ひげ面のくせに花床という床屋の親爺だが、銀蔵は事が起きると床屋仕事はほうり出して、玄次郎のところにやって来る。
「小名木川に女が浮きましてね」
「川流れか」
「そう思ったんですが、引っぱり揚げてざっと見ましたところ、ここが……」
銀蔵は顔を仰向けて喉を指さした。
「絞められてるようなんで。来て頂けますか」

「回り筋だ。行かんわけにはいくまい」
言ったが、玄次郎は浮かない顔色だった。
「今日は役所を休もうと思っていたのだ。ゆうべ飲み過ぎて頭が痛い」
「へへ」
銀蔵は薄笑いした。
「あちらの方も過ぎたんじゃ、ござんせんか」
「人なんざ、毎日死んでおる」
玄次郎は無精たらしく、寝巻の紐を引きずりながら部屋の隅に立って、着換えはじめた。寝巻を落として褌ひとつになったとき、すさまじい筋肉の張りをみせる裸が見えた。玄次郎は、小石川竜慶橋で直心影流の道場を開く酒井良佐の高弟で、二年前までは三羽烏の一人に数えられていた。
「あわてることはないぜ、銀蔵」
「……」
「どうだ。一杯ひっかけてから行くか」
「旦那」
部屋の中ににじり上がって来た銀蔵が、きちっと膝をそろえて坐ると、腕組みして玄次郎を見た。

「そんなわけに行きませんぜ。仏がお待ちかねでさ」
「……」
咎めるような銀蔵の眼をじろじろ見ながら、玄次郎は三つ紋の黒羽織を着、刀を落とし差しにすると、腰の後に朱房の十手をはさみこんだ。
「あら、髷が」
玄関まで見送って出たお津世が、手早く櫛を頭から抜くと伸び上がって玄次郎の髷先に櫛目を入れた。
「へッ。見ちゃいられませんなあ」
銀蔵は捨て科白を言って先に玄関を出た。
「何かあったんですか。親分がだいぶ意気ごんでいるようだけど」
「うむ。流鏑馬の馬みたいにいれ込んでいるようだな。殺しだとよ」
「じゃ、今夜は帰れませんね」
「なあに、帰って来るさ。人殺しにつき合って、夜も眠らねえなんて、いやなこった」
「どうですか」
お津世は薄笑いした。
「いつもそんなこと言いながら、あたしのことなどすぐ忘れてしまうんですから」

# 二

死体は土堤に引き揚げられている。そこは小名木川に架かる高橋と万年橋の間で、遠州浜松六万石の井上家下屋敷の裏手だった。

「向う岸から、ひとが見つけたんでさ」

銀蔵が川向うを指さした。対岸は海辺大工町で、町の裏手の土堤に、真黒に人だかりがして、おし黙ってこちらを眺めている。こっち岸も六間堀と小名木川が落ち合う松平遠江守中屋敷角のあたり、上流の常盤町の河岸のあたりに人が溜っているが、常盤町の自身番から書役が来ていて町内の人間を使って、人が土堤に踏みこむのを封じていた。

「見つかったのはいつごろだい？」

蓆をめくって仏をのぞきながら、玄次郎は書役に訊いた。

「届けがあったのは五ツ（午前八時）ちょっと前でしょう。それですぐに銀蔵親分に使いしたようなわけで」

銀蔵の店は、常盤町からほど近い深川六間堀町にある。玄次郎は銀蔵の顔を見た。その表情を読んで、銀蔵は膨れ面になった。

「遅くなったのは、あたしのせいじゃありませんぜ、旦那。あたしはすぐに八丁堀のお屋敷に

行って」
「よし、それから先は言うな」
と玄次郎は言った。
「神谷さま」
と書役が言った。小心そうな四十男で、黒い顔に心配げな表情が溢れている。弥助という男で、玄次郎とは顔馴染みだった。
「この仏さまは、やはりこちらの町の扱いになりますか」
かかわり合いを面倒がっているのである。川筋には上流に深川西町があり、対岸に海辺大工町があると言いたげだった。
「ここがよくて流れついたんだから、あんたらが面倒みるしかねえだろ」
玄次郎は冷たく突き放した。弥助は答えないで、憂鬱そうに顔をそむけた。その顔を見ながら、玄次郎は訊いた。
「この顔に見覚えはねえのかい」
「はい。いっこうに」
弥助はあわてて顔をもどして答えた。
「町の者ではありません」
「ふむ」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com